

第6章

子どもの土曜日の過ごし方はどうなっているか

明石 要一 (千葉敬愛短期大学 学長)

【要旨】

子どもたちは土曜日にどのような過ごし方をしており、どんな土曜日を望んでいるか、を明らかにした。学校週五日制はとりわけ小学生で定着している。中・高校生の多くは土曜日に学校に通学して部活動を行っている。そんななか、子どもたちの多くは土曜日の「授業」を望んでいない。また、子どもの土曜日の授業観（向学校志向）には、母親の職業、両親の学歴、時間に対するしつけ、通塾、外遊び、自尊感情、心身と体調の状況の影響がみてとれる。今後の土曜日の教育活動は学校を中心として行われるが、「授業」だけでなく、子どもの「向学校」志向を大切に活動プログラムを考えてほしい。

第1節 学校週五日制が生んだ『格差』

学校週五日制は平成4年から始まった。月に2回の土曜日が休日になり、同時に生活科の創設が行われた。小学校1・2年生の理科と社会科を廃して生活科を設置したのである。問いを持ち、調べ学習ができる子どもの育成を目指した。子どもたちに生きる力を身につけさせる狙いがあった。

学校週五日制は、子どもの生きる力は学校だけでは育てられない、家庭や放課後の世界を豊かにすることが不可欠だ、という想いがあった。子どもの生きる力の育成は、家庭と学校と、そして地域のトライアングルが必要だ、という構想である。そして完全実施されたのが平成14年である。学校週五日制になってほぼ20年が経つ。

1) 体験格差が生まれる

この20年間で子どもの世界で何が一番変化したか。それは「体験格差」である。幼児期、児童期に自然体験・生活体験を多くした者とそうでない者が分極化し始めたのである。そして、この体験格差は経済格差によって影響を受ける。体験をお金で買う時代に突入したのである。

年収が800万円を超す家庭の子どもは、冬はスキー、夏は海へ、放課後はお稽古や塾に通っている。一方、年収が250万円以下の家庭の子どもは、親が忙しくてスキーや海には行けなく、お稽古や塾にも通えない。結果として、家の中でマンガとテレビとテレビゲームを友だちとして過ごす。

文部科学省の学力調査の結果をみると、経済格差が学力格差を規定している。私はこの両者の間に「体験格差」がある、と主張する。経済格差が体験格差を生み、その体験格差が学力格差を生むのである（詳しくは拙著『ガリ勉じゃなかった人はなぜ高学歴・高収入で異性にモテるのか』講談社+α新書）。そしてこのサイクルが定着しつつある。

2) この30年間、子どもたちは利便社会の落とし穴に陥る

今の子どもたちは便利な社会の中ですごしている。極端に言えば、朝起きてから寝るまで一言も声を発しなくても生活できるのである。

朝食の時、眠たい目をしている。母親が「パンにしますか、それともご飯にしますか」と聞いても反応がない。忙しい親は「パンですね」と言い、子どもはただうなずくか、首を振るだけである。その子は家を出るとき、「行ってきます」も言わず、黙って学校へ行く。学校の休み時間では友だちと一緒に遊ばず、運動場の隅で友だちの遊びをみるだけの「傍観遊び」に浸る。授業は5時間受けるが、進んで手を挙げない。教師に指されない限り音読はしないし、発表もしない。ただ座っているだけである。

放課後、家に帰宅すると、パートに出かけている母親の置き手紙と小遣いがテーブルの上に置いてある。子ど

第6章 子どもの土曜日の過ごし方はどうなっているか

もはそのお金を持ってコンビニに買い物に行く。欲しい物をかごに入れ、レジに持っていくとバーコードで精算してくれる。30年前までは、地域には駄菓子屋があった。そこではお店のおばさんと子どもの会話があった。しかしコンビニは会話なしで欲しい物が手に入る。また、バスに乗ったとき昔は「運転手さん止めて下さい」と言わなければ停まらなかった。それが今ではボタンを押すだけでよい。

家庭でも学校でも、そして地域社会でも、子どもたちは自分から声を発しなくても生活できる。これが利便社会の落とし穴である。こうした社会は高齢者にとって最適だ。しかし、これから成長する子どもたちにとっては困る社会である。

自ら積極的に社会と関わらなくても生活できるのである。ここからは行動的でチャレンジをする子どもは生まれてこない。生活科や学校週五日制はこうした時代の背景の中で生まれてきたのである。

3) 土曜日に体験格差が顕著になる

学校週五日制が開始された20年ほど前、子どもの放課後の面倒を誰がみるか、という「受け皿」論争があった。

既存のPTA、子ども会、ボーイスカウト、ガールスカウトなどの社会教育関係団体や青少年団体が受け皿になろうとした。ところが、残念なことに既存の団体は指導者や育成者が高齢化し、活動もマンネリ化しており、子どもたちに魅力ある活動を提供できなかった。また、活動を提供しても子どもの心を捉えきれていなかった。実際、子ども会の加入率は平均4割を切っている。ボーイスカウトの加入人口も13万人を割っている。子どもたちが地域の青少年団体に参加する機会は薄れている。

子どもの土曜日と日曜日の活動は、結果として家庭に丸投げされたのである。地域社会に活力がある時代は、たとえ家庭に力がなくても、地域のおじさん、おばさんという第三者が子どもの世話をしてくれた。お祭りをはじめとした地域の行事が豊かであった。子どもたちは地域で鍛えられ、育てられたのである。だがこの20年間、地域の教育力が廃れ、子どもの放課後と土曜日の生活は家庭に任されたのである。その結果、子どもの体験格差が端的に表れるのが、学校のない土曜日や日曜日の生活である。豊かな体験をする者とそうでない者の二極化が始まったのである。

4) 文部科学省が打ち出した体験格差是正の方策

文部科学省は平成26年度に土曜日の体験格差を是正するための方策を打ち出し、平成27年度から実施する。それが、土曜日の教育活動である。

新聞などのマスメディアはここから「土曜日授業」の復活だけをキャッチアップしているが、これは教育課程内の教育活動を想定して、市町村が独自の判断で、新たな発想での「体験格差」是正の施策を実施可能となった。そして社会総ぐるみで活力ある子どもの育成を目指している。放課後社会でも体験格差は生まれている。しかし、もっとも端的にみられるのが土曜日である。家庭の教育力が直接に子どもの生きる力を規定している今、土曜日の教育活動の狙いは、子どもたちの中に生じている「体験格差」を是正することである。

そこで、今一度地域の教育力の復元を図る必要がある。学校という文化的な資源の豊富な空間を利用し、NPOや大学、それから企業、そして地域の既存の社会教育関係団体の支援をいただきながら、子どもにとって「あったらいいな」を形にする夢の教育を創造するのである。

第2節 データが語る、子どもからみた土曜日の過ごし方

教育政策がうまく浸透するか否かを決めるのは、まず制度設計がうまく描けているか、次に財政的な裏付けがしっかりしているか、三つ目がユーザー（受け手）のニーズにあっているか、である。

土曜日の教育活動のユーザーは子どもたちである。彼らは土曜日にどんな過ごし方をしており、どんな土曜日の教育活動を求めているのだろうか。全国的な本調査に基づき、子どもの意見をまとめてみる。

1) 小・中・高校生の土曜日の過ごし方はどうなっているか

—小学生は8割近くが土曜日に通学していない。中学生の5割強、高校生の6割強は通学し、その大半が部活動をしている—

当然であるが、小・中・高校生で土曜日に通学している実態は異なる。土曜日に通学していない者（完全学校週五日制）の数値は次の通りである。

小学生・・・77.3%
中学生・・・42.7%
高校生・・・32.9%

土曜日に月1回通学している者は、小学校で9.1%、中学生で5.2%、高校生で5.3%。そして、月4回以上通学している者は、次の通りである。

小学生・・・3.9%
中学生・・・34.4%
高校生・・・37.2%

さらに、土曜日に通学している者のうち、クラブ活動・部活動を月4回以上をしている者は次の通りである。

小学生・・・20.2%
中学生・・・59.8%
高校生・・・41.5%

土曜日に通学している者は、私立学校を含めて小学生

の17.3%、中学生の54.2%、高校生の64.5%である。そして、土曜日に通学している大半の中・高校生は「個別の補習」を受けるのではなく、部活動に関わっている。しかも活動日は月4回以上が多い。

学校週五日制は小学校ではほぼ定着しているようだ。しかし、中学校や高校ではそうになっていない。「授業」や「個別の補習」ではないが、部活動で通学している。ちなみに、学校で「個別の補習」を受けているのは小・中学生で2～3%、高校生で10%にとどまる。土曜日に学校に通っているケースでも、教科の学習ではなく部活動のための通学であることが多いようだ。

2) 子どもたちはどのような土曜日の過ごし方を望んでいるのか

—小・中学生の7割は「土曜日授業」を望んでいない—
小学生の大半は土曜日を家庭や地域ですごしている。一方、中・高校生たちは半数以上の者が通学している。そこでは主に部活動を行っている。

このような実態の中で、子どもたちはどんな土曜日の過ごし方を望んでいるのであろうか。次の3つの選択肢でたずねてみた。

- ①すべての土曜日を休みにするのがいい
- ②月に2回くらい、土曜日に学校の授業があるのがいい
- ③すべての土曜日に学校の授業があるのがいい

結果をみると、表1の通りである。

興味深い結果が読み取れる。小・中学生のほぼ7割近い者は土曜日の授業を望んでいない。そして、高校生も6割強の者がやはり授業を望んでいない。「すべて授業」を望む者の割合が高い高校生でも約8%にとどまる。また、どの学校段階でもほぼ4人に1人は「月2回」ならいい、と答えている。

表1 土曜日の授業観

	小学生	中学生	高校生
①すべての土曜日を休みにするのがいい	67.3	70.0	61.1
②月に2回くらい、土曜日に学校の授業があるのがいい	26.1	22.9	28.0
③すべての土曜日に学校の授業があるのがいい	4.5	5.1	8.3
④無回答・不明	2.0	1.9	2.6

注 高校生は高1～3生。

表2 土曜日の授業観と母親の就業形態

<小学生>

(%)

	常勤	アルバイト・パート	専業主婦	その他
①すべての土曜日を休みにするのがいい	60.4	69.4	70.0	72.4
②月に2回くらい、土曜日に学校の授業があるのがいい	31.0	24.7	23.7	23.5
③すべての土曜日に学校の授業があるのがいい	6.7	3.7	4.0	4.1
④無回答・不明	1.9	2.2	2.2	0.0

<中学生>

(%)

	常勤	アルバイト・パート	専業主婦	その他
①すべての土曜日を休みにするのがいい	71.6	70.1	69.1	64.2
②月に2回くらい、土曜日に学校の授業があるのがいい	21.5	22.9	24.3	24.4
③すべての土曜日に学校の授業があるのがいい	4.9	5.2	4.8	8.9
④無回答・不明	2.1	1.8	1.8	2.4

<高校生>

(%)

	常勤	アルバイト・パート	専業主婦	その他
①すべての土曜日を休みにするのがいい	60.2	59.8	63.1	66.7
②月に2回くらい、土曜日に学校の授業があるのがいい	29.2	28.6	27.4	21.2
③すべての土曜日に学校の授業があるのがいい	7.9	8.6	7.9	10.6
④無回答・不明	2.7	3.0	1.6	1.5

注1 母親の職業について「無回答・不明」は省略している。

注2 高校生は高1～3生。

3) 子どもの土曜日の授業観に家庭の差はみられるか

子どもの土曜日の過ごし方は親の影響が強いだらう。塾やお稽古、それからスポーツ少年団に通うには親の意向が強いのである。ここで確かめたい「家庭の差」は、「母親の職業と父親と母親の学歴」「家庭の生活のしつけ」の2つの視点である。

①母親の職業と、父親と母親の学歴で土曜日の授業観の差はみられるか

まず、母親の職業で確かめる。結果は表2の通りである。

全体をみると、母親の職業によって「差」がみられるのは「小学生」である。中・高校生はそれほど「差」が

みられない。

小学校では「すべて休み」は60.4%(常勤)→69.4%(アルバイト・パート)→70.0%(専業主婦)→72.4%(その他)と数値が増えていく。フルタイムで働いている母親を持つ小学生は、他の小学生に比べて土曜日の休みを避けがちである。また、フルタイムで働いている母親を持つ小学生は、他の小学生に比べて「月に2回くらい、土曜日に学校の授業があるのがいい」と「すべての土曜日に学校の授業があるのがいい」の数値が一番高い。土曜日の授業観で母親の職業の影響が及ぶのは小学生段階まで、と言えそうだ。

次に父親と母親の学歴で確かめる。結果は表3の通りである。

表3 土曜日の授業観と父親・母親の学歴

<小学生>

(%)

	父親 短大・大学卒	>	父親 高卒まで	母親 短大・大学卒	>	母親 高卒まで
①すべての土曜日を休みにするのがいい	70.3	>	64.8	69.6	>	65.1
②月に2回くらい、土曜日に学校の授業があるのがいい	24.7	<	27.4	24.4	<	27.9
③すべての土曜日に学校の授業があるのがいい	3.4	<	5.5	4.2	<	4.8
④無回答・不明	1.5		2.4	1.7		2.2

<中学生>

(%)

	父親 短大・大学卒	>	父親 高卒まで	母親 短大・大学卒	>	母親 高卒まで
①すべての土曜日を休みにするのがいい	69.1		70.8	69.9		70.2
②月に2回くらい、土曜日に学校の授業があるのがいい	23.4		22.5	22.9		22.9
③すべての土曜日に学校の授業があるのがいい	5.7		4.6	5.8		4.5
④無回答・不明	1.8		2.0	1.4		2.4

<高校生>

(%)

	父親 短大・大学卒	<	父親 高卒まで	母親 短大・大学卒	<	母親 高卒まで
①すべての土曜日を休みにするのがいい	55.3	<	66.1	55.9	<	65.2
②月に2回くらい、土曜日に学校の授業があるのがいい	31.3	>	25.1	31.0	>	25.6
③すべての土曜日に学校の授業があるのがいい	10.3	>	6.6	10.3	>	6.8
④無回答・不明	3.0		2.2	2.7		2.4

注1 学歴については「お父さん(またはお父さんに代わる人)は大学や短期大学を卒業している」「お母さん(またはお母さんに代わる人)は大学や短期大学を卒業している」に○をつけた場合には「短大・大学卒」、そうでない場合は「高卒まで」とした。

注2 高校生は高1～3生。

興味深い結果が読み取れる。小学生では父親、母親とも短大・大学卒の子どもほど土曜日授業を望んでいない。だが中学生では両親の学歴にはほとんど影響を受けていない。そして高校生では両親が短大・大学卒の生徒ほど土曜日授業を望んでいる。これは小学生と異なる。

両親とも高学歴の親を持つ子どもたちは、小学生の時は土曜日を家庭や地域で過ごすことを望むが、高校生になると大学受験のことが気になるのか、学校に通いたくなるようだ。ところが、高卒までの親を持つ子どもたちは逆である。小学生の時は学校に通いたいが、高校生になると家庭や地域で過ごすことを望むようだ。

②親のしつけで、子どもの土曜日の授業観の差はみられるか

ここで用意した親のしつけの項目は、次の3つである。

- ・時間を大切にするように言う
- ・時間を守らないと注意する
- ・時間の使い方についてルールを決める

結果は表4の通りである。数値は4段階評定であるが、データを読みやすくするために「よくある+ときどきある」「あまりない+まったくない」の2段階にして示してある。

表4 土曜日の授業観と親のしつけ

<小学生>

●時間を大切にするように言う

(%)

	①すべての土曜日を 休みにするのがいい		②月に2回くらい、土曜日に 学校の授業があるのがいい		③すべての土曜日に 学校の授業があるのがいい
よくある+ときどきある	65.1	<	71.2	<	81.7
あまりない+まったくない	34.1	>	27.7	>	17.4

●時間を守らないと注意する

(%)

	①すべての土曜日を 休みにするのがいい		②月に2回くらい、土曜日に 学校の授業があるのがいい		③すべての土曜日に 学校の授業があるのがいい
よくある+ときどきある	80.7	<	81.7	<	89.9
あまりない+まったくない	18.8	>	17.0	>	9.2

●時間の使い方についてルールを決める

(%)

	①すべての土曜日を 休みにするのがいい		②月に2回くらい、土曜日に 学校の授業があるのがいい		③すべての土曜日に 学校の授業があるのがいい
よくある+ときどきある	56.5	<	60.7	<	67.9
あまりない+まったくない	42.6	>	38.0	>	31.2

<中学生>

●時間を大切にするように言う

(%)

	①すべての土曜日を 休みにするのがいい		②月に2回くらい、土曜日に 学校の授業があるのがいい		③すべての土曜日に 学校の授業があるのがいい
よくある+ときどきある	63.2	<	70.1	<	78.0
あまりない+まったくない	36.1	>	29.0	>	22.0

●時間を守らないと注意する

(%)

	①すべての土曜日を 休みにするのがいい		②月に2回くらい、土曜日に 学校の授業があるのがいい		③すべての土曜日に 学校の授業があるのがいい
よくある+ときどきある	71.4	<	72.9	<	77.4
あまりない+まったくない	27.8	>	26.5	>	22.6

●時間の使い方についてルールを決める

(%)

	①すべての土曜日を 休みにするのがいい		②月に2回くらい、土曜日に 学校の授業があるのがいい		③すべての土曜日に 学校の授業があるのがいい
よくある+ときどきある	45.5	<	49.9	<	49.4
あまりない+まったくない	53.8	>	49.5	>	50.6

<高校生>

●時間を大切にするように言う

(%)

	①すべての土曜日を 休みにするのがいい		②月に2回くらい、土曜日に 学校の授業があるのがいい		③すべての土曜日に 学校の授業があるのがいい
よくある+ときどきある	53.7	<	64.0	<	67.7
あまりない+まったくない	46.0	>	36.0	>	32.3

●時間を守らないと注意する

(%)

	①すべての土曜日を 休みにするのがいい		②月に2回くらい、土曜日に 学校の授業があるのがいい		③すべての土曜日に 学校の授業があるのがいい
よくある+ときどきある	62.5	<	64.4	<	66.2
あまりない+まったくない	37.2	>	35.6	>	33.3

●時間の使い方についてルールを決める

(%)

	①すべての土曜日を 休みにするのがいい		②月に2回くらい、土曜日に 学校の授業があるのがいい		③すべての土曜日に 学校の授業があるのがいい
よくある+ときどきある	31.2	<	37.6	<	42.3
あまりない+まったくない	68.6	>	62.2	>	56.7

注1 各項目の「無回答・不明」は省略している。

注2 高校生は高1～3生。

興味深い結果が読み取れる。全体的にみて、家庭での時間に関するしつけと土曜日の授業観は結びついていると言える。具体的には、「時間を大切にするように言う」「時間を守らないと注意する」「時間の使い方についてルールを決める」というしつけを受けたことが「よくある+ときどきある」という子どもたちほど、小・中・高校生とも土曜日の授業を望む傾向にある。逆に、そうしたしつけを受けていない者ほど土曜日はすべて休みがよい、と考えがちである。

時間のしつけを受けた者ほど「向学校」志向となり、しつけを受けなかった者ほど「向家庭・地域」志向になる、と言えそうだ。

4) 子どもの生活スタイルで、土曜日の授業観に違いはあるか

①通塾の有無で「差」がみられるか

学習塾に通っている者とそうでない者とは、土曜日の授業観に違いはあるのだろうか。結果は表5の通りである。

小学生と高校生では、塾に行っている者は土曜日の授業を望む。行っていない者は休みを望む。通塾は「向学校」志向を高めているようだ。小学生と高校生は学校と塾が同じベクトルを示している。

表5 土曜日の授業観と通塾の有無

<小学生>

(%)

	①すべての土曜日を 休みにするのがいい		②月に2回くらい、土曜日に 学校の授業があるのがいい		③すべての土曜日に 学校の授業があるのがいい
学習塾に行っている	33.9	<	38.2	<	40.4
学習塾に行っていない	64.6	>	60.4	>	59.6

<中学生>

(%)

	①すべての土曜日を 休みにするのがいい		②月に2回くらい、土曜日に 学校の授業があるのがいい		③すべての土曜日に 学校の授業があるのがいい
学習塾に行っている	50.4		51.6	>	44.0
学習塾に行っていない	48.6	>	47.2	<	54.8

<高校生>

(%)

	①すべての土曜日を 休みにするのがいい		②月に2回くらい、土曜日に 学校の授業があるのがいい		③すべての土曜日に 学校の授業があるのがいい
学習塾や予備校に行っている	19.4	<	29.8	<	32.8
学習塾や予備校に行っていない	78.5	>	68.0	<	63.7

注1 「無回答・不明」は省略している。

注2 高校生は高1～3生。

第6章 子どもの土曜日の過ごし方はどうなっているか

中学生は異なった反応を示す。塾に行っている者ほど「向学校」志向が低くなる。逆に塾に行っていない者ほど「向学校」志向が高くなる。中学生は通塾が肩に強いのしかかっているのだろうか、土曜日の授業と通塾との関係は相反する傾向を示す。

②外遊びをすることで「差」がみられるか

土曜日が休みなら、子どもたちは時間的余裕ができて外遊びをするのであろうか。ふだん外遊びをしている者とそうでない者とは土曜日の授業観はどう違ってくるのだろうか。それを確かめたデータを示す(表6)。

ふだん外遊びをしていない者は土曜日の授業を望まないようだ。それは小学生と中学生に言える。高校生になるとその関係は消えてくる。

ふだん外遊びをしている者ほど学校週五日制を望むと予想していたが、結果は異なる。元気な子どもほど

土曜日でも学校に通いたがるし、授業も受けたがるようだ。

5) 子どもの自尊感情の持ち方で、土曜日の授業観に違いはあるか

日本の子どもの自尊感情は他国と比較すると低いと言われる。その自尊感情の持ち方が土曜日の授業観にどう影響するのだろうか。

それを確かめたデータを示す(表7)。項目は次の5つである。数値は「とてもあてはまる+わりとあてはまる」を抽出している

- ・毎日が楽しい
- ・将来の目標がはっきりしている
- ・自分は将来、幸せになれると思う
- ・将来は世界で活躍したい
- ・これからの世の中を良くするためにがんばりたい

表6 ふだん(学校のある日)、外遊び・スポーツを「しない」と答えた人の割合

(%)

	①すべての土曜日を 休みにするのがいい	>	②月に2回くらい、土曜日に 学校の授業があるのがいい	>	③すべての土曜日に 学校の授業があるのがいい
小学生	30.7		29.4		21.1
中学生	73.0		65.6		66.1
高校生	82.3		83.6		83.6

注 高校生は高1～3生。

表7 土曜日の授業観と自尊感情

<小学生>

(%)

	①すべての土曜日を 休みにするのがいい	<	②月に2回くらい、土曜日に 学校の授業があるのがいい	<	③すべての土曜日に 学校の授業があるのがいい
毎日が楽しい	84.7		90.0		89.9
将来の目標がはっきりしている	50.8		56.0		47.7
自分は将来、幸せになれると思う	71.4		77.9		79.8
将来は世界で活躍したい	39.9		43.6		45.0
これからの世の中を良くするためにがんばりたい	53.8		67.2		64.2

<中学生>

(%)

	①すべての土曜日を 休みにするのがいい	<	②月に2回くらい、土曜日に 学校の授業があるのがいい	<	③すべての土曜日に 学校の授業があるのがいい
毎日が楽しい	80.3		83.4		89.3
将来の目標がはっきりしている	43.2		48.4		51.2
自分は将来、幸せになれると思う	63.1		67.3		69.0
将来は世界で活躍したい	30.9		35.6		33.9
これからの世の中を良くするためにがんばりたい	48.5		57.6		60.1

<高校生>

(%)

	①すべての土曜日を 休みにするのがいい	<	②月に2回くらい、土曜日に 学校の授業があるのがいい	<	③すべての土曜日に 学校の授業があるのがいい
毎日が楽しい	74.7	<	80.7	<	83.1
将来の目標がはっきりしている	50.4	<	60.3	<	58.7
自分は将来、幸せになれると思う	60.6	<	65.9	<	73.1
将来は世界で活躍したい	28.2	<	35.6	<	40.8
これからの世の中を良くするためにがんばりたい	47.1	<	59.0	<	63.2

注1 「とてもあてはまる」+「わりとあてはまる」の%。

注2 高校生は高1～3生。

表8 土曜日の授業観と心身や体調の状態

<小学生>

(%)

	①すべての土曜日を 休みにするのがいい	>	②月に2回くらい、土曜日に 学校の授業があるのがいい	<	③すべての土曜日に 学校の授業があるのがいい
いろいろする	49.7	>	44.2	<	55.0
やる気が起きない	47.9	>	37.4	<	40.4
気分が落ち込む	18.1	>	18.1	<	18.3
自分に自信が持てない	34.3	>	31.5	<	33.9

<中学生>

(%)

	①すべての土曜日を 休みにするのがいい	>	②月に2回くらい、土曜日に 学校の授業があるのがいい	>	③すべての土曜日に 学校の授業があるのがいい
いろいろする	56.9	>	52.9	>	48.8
やる気が起きない	62.0	>	57.8	>	50.0
気分が落ち込む	30.4	>	29.1	>	24.4
自分に自信が持てない	48.2	>	44.7	>	42.3

<高校生>

(%)

	①すべての土曜日を 休みにするのがいい	>	②月に2回くらい、土曜日に 学校の授業があるのがいい	>	③すべての土曜日に 学校の授業があるのがいい
いろいろする	53.2	>	50.2	>	51.2
やる気が起きない	64.4	>	56.4	>	48.3
気分が落ち込む	40.5	>	39.1	>	37.3
自分に自信が持てない	56.7	>	57.3	>	51.7

注1 「とても感じる」+「わりと感じる」の%。

注2 高校生は高1～3生。

データが示すように、子どもの自尊感情の高さと土曜日の授業観は強く結びついている。小・中・高校生とも、自尊感情が高いほど土曜日の授業を望む傾向にある。自分を肯定的にみられる者は「向学校」志向も高いようだ。

6) 心身・体調の状態は土曜日の授業観にどんな影響を与えるか

自己肯定観とは異なるが、自分の心身や体調の状態は

土曜日の授業観にどう影響を与えているのだろうか。それを確かめたデータを示す(表8)。項目は次の4つである。数値は「とても感じる+わりと感じる」を抽出している。

- ・いろいろする
- ・やる気が起きない
- ・気分が落ち込む
- ・自分に自信が持てない

第6章 子どもの土曜日の過ごし方はどうなっているか

心身と体調の状態と土曜日の授業観の結びつきは中学生でクリアになる。つまり、いらいらし、気分が落ち込み、やる気が起きなくて、自分に自信が持てない者は、土曜日はすべて休みを望む。高校生になると少し関係が薄くなるが、まだ「向学校」志向は低いままである。

第3節 まとめ

土曜日の教育活動の狙いは教育格差の是正である。そのために、土曜日に学校での様々な教育活動を推奨している。この活動を進める基礎データをとって、この章では小・中・高校生が土曜日にどのような過ごし方をしており、どんな土曜日を望んでいるか、を明らかにした。学校週五日制は子どもたちの間で定着している。そのことはとりわけ、小学生で言える。中・高校生はいわゆる教科の「授業」は行われていないが、部活動を中心とした教育活動が行われている。中学生で54.2%、高校生では64.5%が土曜日に通学しており、その大半は学校で部活動をしている。しかも活動日は月4回以上が多い。

それでは、どんな土曜日の過ごし方を望んでいるのだろうか。子どもたちは土曜日の「授業」を望んでいない。月4回すべて望む者は小・中学生で4~5%、高校生で8%にとどまる。月2回を含めても3割弱から4割弱である。6割から7割の者は「すべて休み」を望んでいる。

子どもの土曜日の授業観に影響を与えるものは何か。まとめると以下ようになる。

小学生では、やる気の起きない子どもたちは「向学校」志向が低い、他の心身や体調の状況と「土曜日の授業」観とはそれほど結びついていない。未分化のままといった方がよさそうである。

- ・ 母親の職業が影響を与える。「常勤」の母親を持つ子どもは、土曜日は学校に通いたがる。しかし、母親の職業の影響は小学生段階までだ、という限定が付く。
- ・ 短大・大学卒の両親を持つ小学生は土曜日の授業を望まない。しかし、高校生になると授業を望む。
- ・ 時間に対するしつけをしっかりとる親の子どもは「向学校」志向が高い
- ・ 塾に行っている者は、小学生と高校生では「向学校」志向が高いが、中学生では逆のベクトルを示す。
- ・ 小学生と中学生では、外遊びをする者ほど「向学校」志向が高い。
- ・ 自尊感情が高い子どもほど「向学校」志向が高い。
- ・ 心身や体調の状態と土曜日の授業観が結びつくのは中学生である。心身や体調が悪いと「向学校」志向より「向家庭・地域」志向が高くなる。

これからの土曜日の教育活動は学校を中心として行われるが、「授業」だけに偏らないで、子どもの「向学校」志向を大切にしながら活動プログラムを考えてほしい。